



Title	スペイン語における主語・動詞・目的語の語順に関する量的考察
Author(s)	出口, 厚実
Citation	Estudios Hispánicos. 1985, 10, p. 1-17
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/93769
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

スペイン語における主語・動詞・ 目的語の語順に関する量的考察

出口 厚 実

0. 文を構成する諸成文の順序がどのような要因により決定され、規制されるかについては多様な観点から研究が進められている。スペイン語文法の領域でも、一定の文タイプで特定要素の配列を支配する規則性を明示化しようとする試みが部分的ではあるがなされつつある。本調査の出発点はこのような語順の理論的枠付けに踏み込む以前に、現代スペイン語（たとえばその1断片を垣間見る小サンプルであったとしても）の語順の全体像をなるべく多くの異なる角度から数値として捉えておきたいという必要性であった。

調査の方法と対象は既にデータの1部と共に Deguchi (1983 a) で述べられているので、本稿では補足的にしか触れない。また同稿で発表済みの数値は重複を避けて省くことにする。従って、以下の資料は口頭発表（出口1984 a）の内容に補遺・修正を加えたものと、若干の新たな集計結果を併せたものである。

使用された corpus は前稿 (1983 a, 1984 a) と同じ週刊誌 *Cambio* 16, 611号(1983年8月15日号) で、最初の連続24頁分を対象とする。

1.1. 節の種類

語順頻度の計算に考慮した節の種類は次の8種類である。

- (1) 1. 独立断定節
2. 疑問節
3. 命令節

4. 間接疑問節
5. 補文節
6. 連体節 ^{注1}
7. 関係節
8. 副詞節

上記の統語的節種に対する分類基準は概ね拙稿 (1983b) で採用したものに従う。主要な相違は、3種に細分されていた関係節が(1)では1本化されまとめられているのと、出口 (1983b) の「主文」が、今回の語順分析では、「独立断定」「疑問」「命令」に3分割されている点である。この3区分はほぼ自明の分類概念と思われるが、wh語で始まる感嘆文は疑問節に含めることにした。

1.2. 語順要素

文の構成に与かる諸々の単位の相互順序をすべて扱うわけではなく、本稿では文レベルの語順に関連性を有す主要構成素として次の6種を認め、これらを語順要素と呼ぶ。

(2) 0. 動詞群 ^{注2}	略号 V
1. 主 語	S
2. 直接目的語	DO
3. 間接目的語	IO
4. 述語補語	PC
5. 副詞句	AC

動詞群は定形動詞本体だけでなく前接・後接の各種付接辞を包含し得る。また haber+ 過去分詞や poder, deber など、主に不定詞形に従える様々な迂言的表現も1塊の動詞群とみなされる ^{注3}。

1.3. 構成素の属性

主語・直接目的語・間接目的語 NP についてはその属性が文中語順に影響を及ぼすと仮定されるため、(3)の6カテゴリーを区分して集計した。

- (3) 1. wh
2. (強形)代名詞
3. 定

4. 不定
5. ゼロ (無限定)
6. 節
7. 引用文

上表の代名詞には弱形 (i.e. clitic) はあり得ず, 強形人称代名詞・指示代名詞・不定代名詞が該当する。関係代名詞・疑問代名詞及び疑問形容詞を先頭要素とする NP は wh に指定される。数量化限定詞 *alguno, ninguno, todo, mucho, etc.* を伴う NP は「不定」と分類される。なお, 不定詞は que 節と同様, 「節」のメンバーになり得るが, 動詞複合内の不定詞は他動詞の直接目的語と分析されず, 従って「節」の属性が与えられることもない (注 3 参照)。el+不定詞, el que 節などは, 勿論, 「定」とみなされるのではなく, 「節」に含まれる。「引用文」は直接話法文や引用符に挟まれた非接続的独立文を指し, 必ず定形動詞文である。

2.1. 主語の対動詞位置と属性

表 (4) は各節タイプごとに, 主語の属性別に, 動詞と主語の相対的位置関係の出現頻度を示す注 4。

(4)		wh	代名	定	不定	φ	節	計
i) 独立断定	V S	0	11	46	12	0	22	91
	S V	0	55	233	10	4	6	308
	計	0	66	279	22	4	28	399
ii) 疑問	V S	0	0	4	1	0	0	5
	S V	1	0	3	0	0	0	4
	計	1	0	7	1	0	0	9
iii) 命令	V S	0	3	0	0	0	0	3
	S V	0	0	0	0	0	0	0
	計	0	3	0	0	0	0	3

iv) 間接疑問		wh	代名	定	不定	∅	節	計
	V S	0	1	2	0	0	0	3
	S V	2	1	2	1	0	0	6
	計	2	2	4	1	0	0	9
v) 補 文								
	V S	0	3	7	4	1	3	18
	S V	0	9	35	6	0	1	51
	計	0	12	42	10	1	4	69
vi) 連 体								
	V S	0	0	0	1	0	0	1
	S V	0	0	3	0	0	0	3
	計	0	0	3	1	0	0	4
vii) 関 係								
	V S	0	2	25	0	1	4	32
	S V	129	3	21	4	1	0	158
	計	129	5	46	4	2	4	190
viii) 副 詞								
	V S	0	1	14	1	0	4	20
	S V	0	4	36	2	0	0	42
	計	0	5	50	3	0	4	62
総 計								
	V S	0	21	98	18	2	33	172
	S V	132	72	333	24	5	7	573
	計	132	93	431	42	7	40	745

前表の統計から見ると S V, V S 語順の割合はそれぞれ76.9%, 23.1% になり, 主語が動詞に先行する無標順序がその逆順の約 3.3 倍の頻度を示す。なお, 主語が wh 語である場合, その位置に対し統語上の強い規制が働くので, V/S 先後関係を比較する際には除外してみる必要もある^{注5}。また文・節を主語とするケースも NP の定性の程度と関連づけ難いために捨象するとすれば, 「代名詞」「定」を合わせた“限定的な”主語と, 「不定」「無限定」を合算した“非限定的な”主語における S V, V S を次のように対照することができる。

(5) 主語の属性別に見た SV 対 VS

	限 定 的	非 限 定 的	計
S V	405(77.3%)	29 (59.2%)	434(75.7%)
V S	119(22.7%)	20 (40.8%)	139(24.3%)
計	524	49	573

(6) 主語の位置から見たその属性

	S V	V S	計
限 定 的	405(93.3%)	119(85.6%)	524(91.4%)
非 限 定 的	29(6.7%)	20(14.4%)	49(8.6%)
合 計	434	139	573

限定的な主語は非限定的なそれに較べ動詞に先行する比率が高いことがわかるが、後者においても VS が優位を占める程ではない〔cf. 表(5)〕。非限定主語は全体として 8.6%しか現われず、(6)に見られるとおり、VS 語順の文中でもその割合は15%に満たない。

2.2. 再帰文における主語の位置

se受動文・se不定主語文・再帰文・相互文 etc. さまざまな名称で多様な類型化がなされているが^{注6}、ここでは再帰代名詞を含む文をすべて「再帰文」と呼ぶことにする。主語／動詞の順位が再帰性により影響を蒙る可能性を否定できないので、次に再帰文と非再帰文における SV/VS 語順を調べて見た。詳しくは次節で取り上げるが、他の語順要素 (DO, IO, AC) の動詞前生起の有無をも考慮した。

(7)

	再 帰 文	非 再 帰 文	計
V S	29 (29%)	143 (22.2%)	172 (23.1%)
S V	71 (71%)	502 (77.8%)	573 (76.9%)
合 計	100	645	745

再帰文の下位文型別の集計を行っていないので、平均値的に再帰代名詞の存在が動詞の前位を多少とも誘発するのか、特定の再帰文タイプが語順に強く影響を与えるが、再帰文全体としては顕著な数字となって現われ

ないのかは判断し難い。いずれにせよ表(7)で非再帰文より再帰文の方がVS語順の頻度がやや高いのが認められる。

動詞及び主語と共起する他の成分としての副詞的修飾句、直接目的語、間接目的語の出現頻度はそれぞれ469, 283, 32であった。これらの非主語3要素のいずれかが動詞よりも前置される場合の再帰性とSV/VS順序の関連性をまとめたのが次表(8)である。

(8)

a. 前置要素あり

	再 帰 文	非 再 帰 文	計
V S	19 (43.2%)	83 (34.3%)	102 (35.7%)
S V	25 (56.8%)	159 (65.7%)	184 (64.3%)
合 計	44	242	286

b. 前置要素なし

	再 帰 文	非 再 帰 文	計
V S	10 (17.9%)	60 (14.9%)	70 (15.3%)
S V	46 (82.1%)	343 (85.1%)	389 (84.7%)
合 計	56	403	459

副詞句・直接目的語・間接目的語のいずれかが動詞に先行する文では、VS語順がSVを凌がないまでもかなりの高率を示すことがわかる。特に前置要素があるときの再帰文でVS順が目立つ。また前置要素がない場合でのVS/SV比は再帰性の有無による差が小さく、(7)で見た再帰文におけるVSへの偏りは前置要素の存在(cf.(8)a)によってもたらされたと推定できるかも知れない。

2.3. 主題化と主語の位置

ここでは語順要素S, DO, IO, PCが動詞左位に立つことを便宜的に主題化と呼んでおく。従ってSV語順の文には主題主語が含まれることになるが、主語以外の要素の主題化とSV/VS関係を見ると次のとおりである。

(9)

		S V	V S	計
主 題 化	DO	13 (27.7%)	34 (72.3%)	47
	IO	3 (42.8%)	5 (62.5%)	8
	PC	1 (20.0%)	4 (80.0%)	5
小 計		17 (28.3%)	43 (71.7%)	60
副詞句前置		168 (72.4%)	64 (27.6%)	232
そ の 他		388 (85.7%)	65 (14.3%)	453
合 計		573 (76.9%)	172 (23.1%)	745

上表中で、“その他”欄はDO, IO, PC, ACのいずれもが動詞前位に立たない文・節を示す。主語が動詞に対し前置されるか後置されるかについては、他の文要素の主題化が大きな係わりをもつことがこれらの数値から明らかである。主語以外の要素が主題化されるケースでは圧倒的にVS順序が好まれる傾向があり(71.7% vs 28.3%)、副詞的成分を含めて動詞の前に非主語要素の存在しない文型でのVS/SV比率(14.5% vs 85.5%)と対照的である。またVS語順の総度数172に対して、DO, IO, PCの主題化文が占める割合は25%であり、副詞句を含めて何らかの語順要素が動詞に先行して出現する割合は全体の62.2%にも達する。逆に、SV語順における主題化文の比率は3.0%と極めて小さく、副詞句の前置と主題化文を合わせたもの(すなわち、主語以外の少なくとも1成分が動詞に先行する文)が占める割合でも32.2%に過ぎない〔cf. 表(10)〕。この点でもSV, VSタイプの度数分布にきわ立った相違が観察される。

(10)

①主題化文DO,IO,PC)	②副詞句前置文	③1 + 2	そ の 他	計
VS 43 (2.5%)	64(37.2%)	107(62.2%)	65(37.8%)	172
SV 17 (3.0%)	168(29.3%)	185(22.3%)	388(67.7%)	573

さらに、節タイプ別に細別データを示すと次のとおりになる。

(11)

i) 独立断定

	DO-V	IO-V	PC-V	小計	AC-V	計	V-X
S-V	1	0	1	2	115	117	191
V-S	15	2	2	19	36	55	36
計	16	2	3	21	151	172	227

ii) 疑問

S-V	0	1	0	1	0	1	3
V-S	1	0	1	2	1	3	2
計	1	1	1	3	1	4	5

iii) 命令

S-V	0	0	0	0	0	0	1
V-S	0	0	0	0	1	1	2
計	0	0	0	0	1	1	3

iv) 間接疑問

S-V	0	0	0	0	4	4	2
V-S	0	0	1	1	2	3	0
計	0	0	1	1	6	7	2

v) 補文

S-V	0	0	0	0	9	9	42
V-S	1	1	0	2	3	5	12
計	1	1	0	2	12	14	54

vi) 連体

S-V	0	0	0	0	1	1	2
V-S	0	0	0	0	0	0	1
計	0	0	0	0	1	1	3

vii) 関係

S-V	12	2	0	14	34	48	110
V-S	17	1	0	18	15	33	0
計	29	3	0	32	49	81	110

viii) 副 詞

	DO-V	IO-V	PC-V	小計	AC-V	計	V-X
S-V	0	0	0	0	5	5	37
V-S	0	1	0	1	6	7	13
計	0	1	0	1	11	12	50

独立断定文とその他の節型，すなわち従属節または意味的により従属的な性質をもつ節タイプ（命令文・疑問文）に2大別した場合に語順上の差異があるかどうかを調べるため，後者を合算して比較したものが(12)である。

(12) 従属節及び疑問文・命令文

	DO-V	IO-V	PC-V	小計	AC-V	計	V-X
S-V	12	3	0	15	53	68	197
V-S	19	3	2	24	28	52	30
計	31	6	2	39	81	120	227

上表の数値と(11)の i) の独立断定節のそれを比較すると，主語以外の語順要素が動詞に先行しない順序型では両種類ともほぼ同率のSV/VS 比を見せている。一方，何らかの要素（DO, IO, PC, AC）が動詞より左にある文パターンに対しては，独立断定節の SV:VS は 2.13 であるのに，従属的節タイプでは 1.31 を示し，大きな開きが見られる。ところが，主題化文における VS の割合は独立断定節で90%，従属的各節種で61.5%となり，反対に前者の方に著しい VS 性向が認められる。

2.4. 動詞 / 直接目的語の位置

この項では直接目的語の主題化，i.e. 動詞に先行するか否かと，主語・直接目的語の属性との関連性を探る。節種の細別を省略して， x 軸に主語の有無及びその属性を表わし， y 軸には直接目的語 NP の属すカテゴリーを分類する。主語の主題化との関連で DO が動詞に先行する頻度の総数は既に § 2.3. で見たが，ここに掲げる表には主語削除文における DO/V 関係を含めている。

(13)

a) V-DO

DO\S	無	wh	代名	定	不定	ϕ	節	引用	計
Wh	0	0	0	2	1	1	1	0	5
代名	6	3	1	1	0	0	0	0	11
定	51	26	10	59	4	0	0	0	150
不定	37	9	6	34	4	0	1	0	91
ϕ	18	8	3	18	3	1	1	0	52
節	17	1	4	18	2	0	1	0	43
引用	4	0	1	12	0	0	0	0	17
計	133	47	25	144	14	2	4	0	369

b) DO-V

DO\S	無	wh	代名	定	不定	ϕ	節	引用	計
Wh	12	0	1	27	0	0	1	0	41
代名	1	0	0	1	0	0	0	0	2
定	1	0	1	6	1	0	0	0	9
不定	0	0	0	0	0	0	0	0	0
ϕ	2	0	0	0	0	0	0	0	2
節	2	0	0	0	0	0	0	0	2
引用	2	0	1	7	1	0	0	0	11
計	20	0	3	41	2	0	1	0	67

c) 全 体

DO\S	無	wh	代名	定	不定	ϕ	節	引用	計
Wh	12	0	1	29	1	1	2	0	46
代名	7	3	1	2	0	0	0	0	13
定	52	26	11	65	5	0	0	0	159
不定	37	9	6	34	4	0	1	0	91
ϕ	20	8	3	18	3	1	1	0	54
節	19	1	4	18	2	0	1	0	45
引用	6	0	2	19	1	0	0	0	28
計	153	47	28	185	16	2	5	0	436

総数で DO-V 順序は全体の15.4%であるが、その67例のうち wh 直接目的語のケースが41 (61.2%) を占めていて、他範疇の DO 主題化文は意外に少ない。wh 以外では引用文の前置される場合がやや多い (V-DO/DO-V の比が1.55)。有主語文での DO の主題比率13.1%と主語削除文でのそれ16.6%と間には目立った差が見られない。

2.5. 文の長さとう語の位置

文を構成する語順要素の総数 (AC は 2 度以上現われ得る) を文の長さと考えと、主語は何番目に最も多く出現するだろうか。Corpus に発見された最大長は 9 で、1 例のみ確認された。また、下表からわかるように主語が文頭から数えて 6 番目以降に立つ例は記録されなかった。表 (14) で縦軸は主語が何番目に現われるかを示すが、 ϕ は無主語の度数を表わす。

(14)

文長 Sの順位	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
0	16	132	109	56	14	1	0	0	0	328
1	0	27	181	155	59	12	5	1	0	440
2	0	32	10	56	42	8	7	0	0	155
3	0	0	78	15	7	8	0	0	0	108
4	0	0	0	23	8	1	0	1	1	34
5	0	0	0	0	6	2	0	0	0	8
6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
7	16	191	378	305	136	32	12	2	1	1073

文長 1 ～ 9 のそれぞれで、主語の順位別の百分比を求めたのが表 (15) である。

(15)

文長 Sの順位	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
ϕ	100	69.11	28.84	18.36	10.29	3.13	0	0	0	30.57
1	0	14.14	47.88	50.82	43.38	37.50	41.67	50.00	0	41.01
2	0	16.75	2.65	18.36	30.88	25.00	58.33	0	0	14.45
3	0	0	20.63	4.92	5.15	25.00	0	0	0	10.07

4	0	0	0	7.54	5.88	3.13	0	50.00	100	3.17
5	0	0	0	0	4.41	6.25	0	0	0	0.75
6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
計	100	100	100	100	100	100	100	100	100	100

次に、(14) から無主語文を除き、有主語文全体に占める主語の順位の比率をとったものが (16) に示される。

(16)

文長 Sの順位	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
1	0	47.76	67.29	62.25	48.36	38.71	41.67	50.00	0	59.06
2	0	54.24	3.72	22.49	34.43	25.81	58.33	0	0	20.81
3	0	0	29.00	6.02	5.74	25.81	0	50.00	0	14.50
4	0	0	0	9.24	6.56	3.23	0	0	100	4.56
5	0	0	0	0	4.92	6.45	0	0	0	1.07
6	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

なお、資料全体で観察された文長の割合を (14) からパーセンテージで表わすと (17) になる。

(17) 文の要素数

1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
1.5%	17.8%	35.2%	28.4%	12.7%	3.0%	1.1%	0.2%	0.1%	100%

2.6. 文の長さとは直接目的語の位置

前項と同様な位置関係を直接目的語に関して頻度を調べたものが(18)～(20)で、(18)は絶対度数を、(19)(20)はそれぞれ総文数及び有 D O文での直接目的語の相対的順位の比率を計算している。

(18)

文長 DOの順位	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
φ	16	140	232	167	65	13	4	0	0	637
1	0	6	33	18	6	2	1	0	0	66
2	0	45	23	4	1	0	0	0	0	73

3	0	0	90	50	8	1	1	0	0	150
4	0	0	0	66	29	2	0	0	0	97
5	0	0	0	0	27	8	3	0	0	38
6	0	0	0	0	0	6	1	2	0	9
7	0	0	0	0	0	0	2	0	0	2
8	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1
計	16	191	378	305	136	32	12	2	1	1073

(19)

文長 DOの順位	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
φ	100	73.30	61.38	54.75	47.79	40.63	33.33	0	0	59.37
1	0	3.14	8.73	5.90	4.41	6.25	8.33	0	0	6.15
2	0	23.56	6.08	1.31	0.74	0	0	0	0	6.80
3	0	0	23.81	16.39	5.88	3.13	8.33	0	0	13.98
4	0	0	0	21.64	21.32	6.25	0	0	0	9.04
5	0	0	0	0	19.85	25.00	25.00	0	0	3.54
6	0	0	0	0	0	18.75	8.33	100	0	0.84
7	0	0	0	0	0	0	16.67	0	0	0.19
8	0	0	0	0	0	0	0	0	100	0.09
計	100	100	100	100	100	100	100	0	0	100

(20)

文長 DOの順位	1	2	3	4	5	6	7	8	9	計
1	0	11.76	22.60	13.04	8.45	10.53	12.50	0	0	15.14
2	0	88.24	15.75	2.90	1.41	0	0	0	0	16.74
3	0	0	61.64	36.23	11.27	5.26	12.50	0	0	34.40
4	0	0	0	47.83	40.85	10.53	0	0	0	22.25
5	0	0	0	0	38.03	42.11	37.50	0	0	8.72
6	0	0	0	0	0	31.58	12.50	100	0	2.06
7	0	0	0	0	0	0	25.00	0	0	0.46
8	0	0	0	0	0	0	0	0	100	0.23

スペイン語の語順で主語は直接目的語より一般に前方に位置することを我々は経験的な直観として持っているが、このことが上のデータから得られる数値化と合致するか見てみよう。(14) 及び (18) の各順序別合計において、順位 n に点数 n を乗じた数値の総和を、それぞれ有主語文総数、有直接目的語文総数で割ることにより平均値を求めれば、主語の中心順位として1.678、DO の重心として3.02が得られる。予想された通り、直接目的語は主語より後方に立ち、平均化すればほぼ第3順位を占めるのに対し、主語順位の分布は前方に片寄っていて先頭と第2要素の中間よりやや後に位置すると言える。

2.7. S/DO/IO 文の語順

主語・直接目的語・間接目的語が共起する文型は Corpus 全体で17例発見された（出口1983a の表ⅡタイプH）が、その語順の内訳は次のようになる。なお、述語補語・副詞の両要素またはいずれか一方が含まれている文も対象となっているがその位置は無視する。

(21)

S-V-DO-IO	7	41.2%
S-V-IO-DO	8	47.1%
V-DO-S-IO	2	11.7%
計	17	

同様に、主語を含まない DO/IO 文での動詞・直接目的語・間接目的語の語順は次の4種類が発見された。

(22)

V-DO-IO	15	50.0%
V-IO-DO	8	26.3%
DO-V-IO	4	13.7%
IO-V-DO	3	10.0%
計	30	

この文型での動詞語彙項目とその頻度を集計したのが (23) である。

(23) dar 6 hacer 3 conceder 2
 prestar 2 abrir 以下各 1 afirmar

confesar	desear	disputar
enviar	esbozar	explicar
ordenar	pedir	pegar
producir	sacar	solicitar
tomar	tender	tener

2.8. DO/IO の位置とその属性

前項の DO/IO 文30例における両目的語の先後関係とそれぞれの属性を次表 (24) に示す。横軸は直接目的語の、縦軸は間接目的語の所属範疇を表わす。

(24) a. IO-DO

IO\DO	wh	代名	定	不定	φ	節	引用	計
wh	0	0	1	1	0	0	0	2
代名	0	0	0	0	0	0	0	0
定	0	0	2	2	1	2	1	8
不定	0	0	0	1	0	0	0	1
φ	0	0	0	0	0	0	0	0
節	0	0	0	0	0	0	0	0
引用	0	0	0	0	0	0	0	0
計	0	0	0	0	0	0	0	11

b. DO-IO

IO\DO	wh	代名	定	不定	φ	節	引用	計
wh	0	0	0	0	0	0	0	0
代名	0	0	0	0	0	0	0	0
定	1	0	4	3	5	0	1	14
不定	0	0	0	1	1	0	0	2
φ	0	0	0	0	0	0	1	1
節	0	0	1	0	1	0	0	2
引用	0	0	0	0	0	0	0	0
計	1	0	5	4	7	0	2	19

c. 全 体

IO\DO	wh	代名	定	不定	φ	節	引用	計
wh	0	0	1	1	0	0	0	2
代名	0	0	0	0	0	0	0	0
定	1	0	6	5	6	2	2	22
不定	0	0	0	2	1	0	0	3
φ	0	0	0	0	0	0	1	1
節	0	0	1	0	1	0	0	2
引用	0	0	0	0	0	0	0	0
計	1	0	8	8	8	2	3	30

上表から〔直接―間接〕語順対〔間接―直接〕語順の比はほぼ 2 : 1 に相当することがわかる。標本数が少ないために特徴をつかみにくいですが、いずれの語順でも IO は「定」のカテゴリーに属すケースが圧倒的に多い(73.3%)。また、直接目的語 NP が無限定であると IO-DO 順は 1 例しか観察されないのに対し、DO-IO 語順は 7 例見出されるのが目立つ程度である。

(1984年12月10日)

〔 注 〕

1. 出口 (1983b, 1984a) では「de節」と呼ばれていたものに相当する。
2. 以下、誤解の恐れがないときは「動詞」と表記する。
3. 付接辞や助動詞的動詞を語順要素として考慮しない根拠については拙稿 (1983a : § 2.2 及び 2.3) を参照のこと。当然, clitic は (2) 2, 3 項の直接目的語・間接目的語に該当しない。一般的な統語的基準による助動詞性の議論と, ここで言う動詞複合 (語順の視点を優先する) はほとんど無関係である。例えば *Quiero ver la película* は動詞群+直接目的語と分析するが, *ver la película* を *querer* の目的語と考えるのではなく, *quiero ver* を動詞群 (Aux+V) とし, *la película* を DO とみなしている。また, 文 *Quiero ir allí* は 2 つの語順要素 V-AC から成る。各々の文で核的動詞 (語順要素を意味的に統御する動詞) は *ver*, *ir* であって *querer* ではない。
4. 主語 NP で「引用文」の範疇に属す例は発見されなかったので, 表 (4) にこの属性を表記しない。

5. wh 語を含まない疑問文も統語上別扱いを要する定型とみなすべきかも知れない。しかし、その事例は全部で8例しかなかったためここでは排除しない。
6. 分類基準についての詳論は拙稿(1984b)に見られるが、語順そのものが一つの類別要因となり得るかどうかは未検討である。

REFERENCES

- Deguchi, Atsumi (1983 a) "Aspectos cuantitativos del orden de palabras en el español contemporáneo" — *Lingüística Hispánica* 6, pp. 55–66
- 出口厚実 (1983 b) "節の統語型と叙法" — *Hispánica* 27, pp. 20–36.
- (1984 a) "現代スペイン語における語順の量的側面" 関西スペイン語研究会第88回例会研究発表, 1984. 2. 25 於大阪外大
- (1984 b) "再帰構造論 (3) —再帰文のパターンと分類基準—" — *Estudios Hispánicos* 9, pp. 1–15.